不定期刊行　　第433号　2011.12.23

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

耐寒ビバークと雨引山、有明山

ロープワーク

雨引山

冬型が強烈に強まった 17 日、県ヶ丘山岳部と池工山岳部はコラボで合宿を実施した。池工が生徒6、顧問2、県ヶ丘が生徒4顧問1の合計13名であった。初日は松川村馬羅尾キャンプ場から雨引山に登った。8:45 林道から登山道に入りしばらく進むと、前日に降った雪が数㎝。今シーズン初めての雪上歩行となった。この登山道は送電線の監視路。地図には記載がないので、格好の読図トレーニングとなる。1ピッチ強、10:10 に熊の倉岩と呼ばれる大岩に到着。ここは、ちょっとした悪場になっている。時間はたっぷりあるので、ここでロープを出して1時間ほどフィックス通過の練習と懸垂下降の実践訓練。同じ懸垂でも人工岩場とは勝手が違う。松田さんの懸垂を見て、生徒たちから「かっこいい」と歓声があがる。そこからはおよそ1時間弱、12:00前には頂上についた。快晴とはいかないまでも、眼下に広がる大町の景色と常念山脈から後立山の雪景色に満足。12:30 下山開始。下りは唐沢山との間の林道を経由し、キャンプ場に戻った。

今回のメインは標題の通り、耐寒ビバークである。14:00、山から下りて早速生徒一人一人に焚き火をせよと命ずる。その条件は、「自分の火は自分で熾すこと。マッチライター以外は文明の利器は一切使ってはいけない。現地にあるものだけを使って火をつけること。」というもの。前日降った雪のせいで焚き火の名人を自認する松田さんでさえ、一回目のライターで火を点けることはできないという悪条件。生徒たちは苦戦。顧問の二人は自分たちの火を点けてから、生徒の間を回ってはニヤニヤ。家に薪ストーブがあるという池工のN君、また中学校時代友だちと悪さをしてこんな遊びをしていた？というＩ君がなんとか火をつけることができた。「コツは熱を逃がさないようにしてできるだけ構ってはいけない」などと言っても、なかなか生徒にはわからない。それは当然、やはりこういうことは経験がものを言う。

ビバーク

そろそろ暗くなり始めた 16:00 ころ、それぞれ学校ごとに夕食準備。どちらも今日のメニューは焼き肉である。肉を食べながらも火が気になる生徒たち。空には星が瞬きだし、急激に寒くなってくる。耐寒ビバークには最高のシチュエーション。19:00、腹はいっぱいになったが、メインイベントはまだまだこれからだ。女性顧問の藤田さんと女

子のＹだけはテントにはいる。小生は松田さんと一杯やりながら 12:00 過ぎまで語り明かした。さすがに朝方の冷え込みは半端ではなかった。特に貧弱なシュラフ、さらには朝まで火を絶やさずにたき続けることができなかった生徒たちにとっては、寒かったことだろうと思う。しかし、朝起きて煤で真っ黒になった生徒たちの顔は、心なしか逞しく見えた。

朝食後、行けるところまで行こうと言うことで、有明山方面へと歩を進めた。有明山へ続くこの登山道は、今は松川村が整備しているが、かつて「池工山岳部」が荒廃していた登山道を 10 年かけて開拓整備したゆかりの道である。生徒たちにはことあるたびにその話をしてきたが、去年の赴任以来登ることができなかった。当時のＯＢや顧問の矢口先生にも声をかけて、10 月に盛大に登ろうという計画を立てたのだが、夏に水害で道路が通行止めになってしまったこともあり、結局この時期になってしまったのである。河原をせめて不動滝までと思って登りだしたが、池工山岳部のチョンボ（何と部室に朝食の食材を忘れてきた！）もあり、出発が大幅に遅れた上に雪もあり、大曲までで引き返した。そのおかげで、帰路に第 1 渡渉点からちょっと足をのばして今まで見たことのなかった親子糸滝を見ることができたのは、逆にラッキーだった。氷りつつある滝の姿というものを初めて見た生徒たちはこれだけで十分感動していた。

というわけで、この時期の北アルプス前衛峰の 2 山を満喫しながら、一晩シュラフと焚き火だけでビバークするという貴重な体験をした生徒たち。多分、僕らが意図する以上のことを得たことだと思う。

ヤズィックアグルの蒼い空 26　　ウルムチへ戻る

ホータンから 1 時間 20 分、砂漠を一飛び。往路、期待に胸をふくらませ一抹の不安も持ちながら、たった一泊しただけでカシュガルへと向かった自治区の都ウルムチに帰ってきた。ウルムチでは暑い夏が待ち構えていた。城市大酒店（キャピタルホテル）が今回の宿舎。ここは市街地の中心地でウルムチの政治、文化、ファッションなどすべての発信場所の真ん中にある。10 年前の遠征では登山が成功した後、ここの 3 階にあった日本人の経営する寿司屋で、ヌルさんが登頂祝いを開いてくれたこともある。ネタは日本から空輸、ビールも中国国内製造ではあるもののサッポロビールの飲める店だった。そのウルムチにあったたった一軒の寿司屋は、残念ながら今年夏前に閉店したとのことだった。

それはともかく、ウルムチの町でも警戒は厳しい。町の真ん中のホテルだからだろうか、外出先から帰るたびに入り口で荷物検査が行われるのには閉口した。一事が万事、ヌルさんが住みづらくなったというのも分かる気がする。しかし、アイレットさんに言わせれば、すべてマスコミの情報操作に踊らされているという。

閉ざされた国家、強権的な国家の現実は自分で来て、実際に触れ、そのにおいや手触り、雰囲気に触れることで初めてその実態が少し見えてくる。メディアリテラシーが声高に言われる現在、我々も限られた情報の中で何をどう思うかが問われてくる。しかし、お仕着せのツアーではない我々の旅は、普通の人よりもほんの少し真実をかぎ分けることが容易なのかもしれない。

住みにくくなったとはいえ、我が家のある場所、ヌルさんが心なしか弾んでいるようにも見えた。